

特集：農とレクリエーション

## 農山村地域における環境教育

### —群馬県川場村の事例—

栗田 和 弥\* 麻 生 恵\*

#### Environmental Education on Agricultural and Forestry Countryside —A Case Study on Kawaba Village, Gunma—

Kazuya KURITA, M.L.A. and Megumi ASO, D.Ag.

#### はじめに

ひと口に環境教育といっても、その位置づけは多様である。義務・高等教育などのカリキュラムの一環として行なわれる学校環境教育、自治体レベルで行なわれるリサイクルシステムなどの社会環境教育、エコ・ミュージアムの一環として位置づけられる生活環境教育、自然地域におけるエコ・ツーリズム、グリーン・ツーリズムやインタープリテーションなどによるフィールド環境教育などが挙げられる。近年は世界的に、農山村地域におけるレジャー・レクリエーションの一形態を含む環境教育の展開事例が増え、注目を集めている<sup>2)3)</sup>。

本論では、農山村地域住民と都市地域住民との交流によって結ばれるアウトドア活動を中心としたフィールド環境教育について、群馬県川場村における事例を通して考えてみたい。

#### 1. 都市地域と農山村地域を結ぶ交流

群馬県利根郡川場村では、東京都世田谷区と1981(昭和56)年から相互協力の協定(緑組協定<sup>1)</sup>)が結ばれ、農山村地域と都市地域との交流が「世田谷区民健康村」を中心に行なわれてきた。当初は、世田谷区民の宿泊・休養のための利用が主であったため、都市側

から農山村側への一方的な交流が中心であった。この理由として、都市住民のための現地での活動プログラムの不足や、農山村住民が都市住民と出会って一緒に活躍する場面の少なさなど、ソフトウェアの不足があったといえる。

これらの反省点を解消すべく、交流10周年記念事業として1993(平成5)年に、「友好の森事業」が開始され、ハード面のみならずソフト面の充実を目指した新しいコンセプトが設定された<sup>5)</sup>。つまり、区民が一方的に川場村の環境を利用してきた従来の方式から一歩進んで、区民と村民が一緒になって川場村の森をつくり守るという新しい目標が掲げられたのである。

#### 2. やま(森林)づくり塾について

「友好の森事業」を支える中心的活動として、<やま(森林)づくり塾>がある(図-1)。この<やま(森林)づくり塾>には、森林管理活動を中心とした<養成教室>と<体験教室>、および環境教育活動を主に行なう<自然教室>が設けられている。

<養成教室>および<体験教室>は、一般の参加者を募り、村民と協働で森林を守り育てることを目標に、専門的技術の習得や実際の作業、そして座学なども交えて活動を行なう。特に<養成教室>は四季を通して

\* 東京農業大学農学部 Faculty of Agriculture, Tokyo University of Agriculture

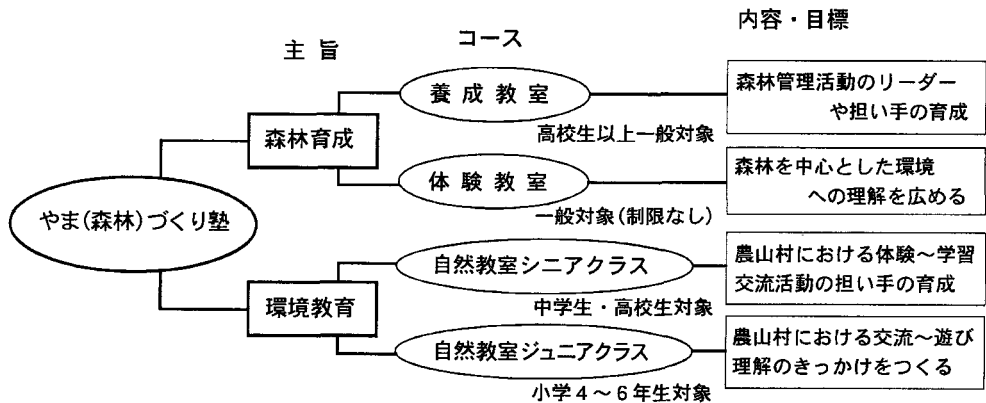


図1 「友好の森事業」やま(森林)づくり塾の体系

行なわれ、森林管理活動のリーダー養成を目指している。

<自然教室>は、子ども向けのプログラムであり、川場村の自然環境・社会環境を理解させ、次世代の交流の担い手を育てることを目的にしている。年齢に応じて、小学校4～6年生を対象とした<ジュニアクラス>と中学・高校生を対象とした<シニアクラス>の2コースを設けている。共に世田谷区および川場村の参加者(子ども達)が交流を行ない、環境教育活動を展開している。毎年夏に3泊4日(ジュニア)と5泊6日(シニア)の日程で行なっている。

さて、<やま(森林)づくり塾>を動かすシステムには3つの要素が重要とされる。つまり、①ハードウェア(フィールド)、②ソフトウェア(プログラム)、それに、③ハートウェア(人)でありそれぞれ有機的に結びつきがあって始めて成立するものと考えられる。

①ハードウェアは、活動フィールドと施設に大別される。

「活動フィールド」は、広い意味での自然地域またはランドスケープ空間ということができる。集落、農地、森林、草原、河川、山岳など農山村地域を構成する要素といってよい。環境教育そして実践的な保全活動を実行する場所としての対象は、村内に広がる農地や森林、および森林所有者(林家)と区民が共働で森を育てている「友好の森」が中心となる。また、活動の拠点となる施設として、宿泊施設としても利用される世田谷区民健康村「ふじやまビレジ」、および「なかのビレジ」が整備されている。

②ソフトウェア、つまり、交流のためのプログラムとしては、先述したく<自然教室>、そしてく<養成教室>、<体験教室>がある。

③ハートウェアは、参加者、スタッフ、バックアップ体制を構成する人々からなる。

「参加者」としては、世田谷区民が主体で、<自然教室>には川場村民(子ども達)も参加する。

「スタッフ」としては、1)実際の活動を指導するセミプロフェッショナル(<自然教室>:東京農業大学造園学科風景計画学研究室員を中心とした学生リーダー、<養成・体験教室>:同林学科林政学研究室員を中心とする学生リーダー)の他、地元の学識経験者や登山家など自然環境について詳しい講師、2)森林管理のプロフェッショナルとして、川場村に拠点をもつ「利根沼田中部森林組合」の職員、3)運営を担当する「(株)世田谷川場ふるさと公社<sup>9)</sup>」の職員、その他である。

「バックアップ」としては、現地での資材準備や運営のサポートを行なう地域に密着した機関として「(株)世田谷川場ふるさと公社」、参加者募集などの支援を行ない主催する自治体「世田谷区」と「川場村」があった。

以上の、民、学、官がパートナーシップを組んで、交流活動を相互に支えている。

これらの交流活動では、区民が週末の単なる休息や一過性の農林業活動に終わらないことが特徴になっている。川場村という一つの限定された地域の事情に精通し、親しみと愛着を持ってもらうこと、レジャー・レクリエーションを兼ねながらも繰り返し参加し、長

い将来にわたって森林を守り育てる活動をしていくことにある。

### 3. 自然教室における環境教育

<自然教室>では、都市住民（世田谷）と農山村住民（川場）が参加し、<ジュニアクラス>の50名と<シニアクラス>の30名が夏休み期間内に同時並行して行なわれる<sup>6)</sup>。また、一部プログラムを共通にして学年間の交流も行なわれている。具体的活動としては主に農山村地域をフィールドとし、田園や森で遊ぶアウトドア・レクリエーション（自然環境への気づき）、農家で農作業・森林作業の体験（伝統的生活環境、環境管理の体験）、参加者と地元の人との交流、参加者独自に考えたプログラムによる活動（環境管理の実践）を実施している（表-1、写真-1,2）。

この<自然教室>は、世田谷区民および川場村民双方に対して募集が行なわれ、交流がなされる。世田谷区の参加者（子ども達）にとっては、普段から遊んで地元の自然を詳しく知っている川場村の子ども達から学ぶことは多い。また、川場村の子ども達も地元の紹介・案内ができ、そして時には未だ知らなかった村の一面を知ることができるなど、よい刺激になっている。

参加者は自由意志により<自然教室>に参加しているが、継続的に参加を希望する者が毎年増える傾向にある。年毎に変化のあるプログラム内容による「楽しみ」や、同じフィールドを継続的に利用し、移り変わる環境を見守り「育てる」ことができるという面白さもある。また、川場村で会える固定した「馴染み



写真1 やま(森林)づくり塾自然教室のプログラム (リンゴとブルーベリーを栽培する農家で のファームステイにおける収穫作業)



写真2 やま(森林)づくり塾における森林管理作業

の顔ぶれが揃っていることも重要である。参加者と学生リーダーとの間に同窓会のような組織が生まれ、<

表1 やま(森林)づくり塾自然教室の活動プログラム

(農山村をフィールドとした環境教育プログラム例、1995～97年度 中・高校生対象シニアクラス)

活動の柱	活動フィールド	プログラム内容	環境教育の視点*
① 地域社会の理解	農山村全体	ファームステイ(農家・酪農家に滞在、農作業や生活を体験)	気づき～体験
② 自然環境の理解	農山村全体	植生調査、バードウォッチング	気づき～体験
③ 森林育成	森林(雑木林・植林地)	ティピー(簡易テント)作り(間伐作業・間伐材利用)、宿泊	体験～実践
④ アドベンチャー	田園・牧場他	ソロビパーク(一人で野宿をする)、村内オリエンテーリング	体験～実践

\* 環境教育の発展過程を「気づき」→「体験」→「実践」の3段階とした場合のプログラム内容の視点

自然教室>の期間を越えた、日常の交流も生まれるようになった。

#### 4. 環境教育の効果

こうした<やま(森林)づくり塾>の活動を総合的な環境教育活動としてとらえたとき、その効果は次のようにまとめることができる。

①森林や田園風景など川場村の魅力ある環境が、林業や農業といった地域の人々の働きかけの結果生まれてきたものであるという理解が深まり、またそれを維持するためにはそうした働きかけが必要であるという認識が参加者に定着しつつあること。また、村民にとっても新しい視点からの(レジャー・レクリエーション資源や自然活動のフィールドとしての)地域の再発見があったこと。

②フィールド活動を通して、森林管理や環境管理の技術や知識が身につく、自発的な管理活動がはじまりつつあること。また、そうした資質を備えた活動のリーダーや将来の交流の担い手が育ちつつあること。

③人的な交流により、「第二のふるさと」ともいえるほど、参加者(区民)にとって川場村への愛着や親しみが生まれつつあること。

#### 5. 今後の課題

毎年のプログラムづくりが、スタッフとはいえ学生をボランティア中心に行なわれていることは変化に富む内容を作り出すことになる。しかしその反面、継承性・発展性に欠けるという側面がある。それを補っているのが直接の受け入れ側(活動拠点)となる「(株)世田谷川場ふるさと公社」の職員であり、このような常駐の専属スタッフの存在は大きいといえる。

また、専属のスタッフに限らず、例えば村民のボランティアや定年退職者などによる常駐(常連)の人材の確保、それによって、いつ行ってもスタッフに会えるという安心できる体制づくりと、森林管理・環境教育ボランティアの拠りどころとなり、自然環境、農林業技術などを情報の発信・受信する拠点の確立が望まれる。さらに、<やま(森林)づくり塾>が開催されない期間においても森林管理や農作業を手伝えるようにするなど、活動の自由度を持ったプログラムづくりが必要である。

そのために、「友好の森」区域内に、在来の宿泊施設に代わる活動拠点として、「森のむら」の建設が始まっている。これは、地元の伝統デザインにもとづく民家風の宿泊施設で、山仕事を中心としたく養成・体験教室>の生活様式に対応でき、また併設される博物館と一緒に山文化、農村文化が体験できるようになっている。

今後はまた、環境教育の軸となる<自然教室>のリーダーとしての担い手を育てることも課題である。現在、自然教室に参加してきた世田谷区の中学生の1人は、地元の高校に進学し、高校生としてシニアクラスに参加し続けている。また、1997年からは<自然教室シニアクラス>を終えた生徒が学生リーダーとなった。彼はスタッフへと役割を変えても、川場村と係わり続けている。

このように川場村で展開されている環境教育は、単に農山村の環境の理解・学習にとどまらず、世代を超えた長期的な視野に立ちながら、また人的な交流も行ないながら進められているのが大きな特徴であるといえよう。

#### 文献および補注

- 1) 清里環境教育フォーラム実行委員会編(1992):日本型環境教育の提案. 小学館, 448pp.
- 2) 栗栖祐子(1996):先進事例にみるグリーン・ツーリズム成功の条件. 林業技術, 656. pp.11-14.
- 3) 森高一(1997):BTCVのナチュラルブレイク. 月刊観光, 370. pp.23-26.
- 4) 岡島成行(1997):「子どもと自然」をキーワードにつくる自然学校. ビオシティ, 10, pp.24-27.
- 5) 世田谷区企画部編(1993):「友好の森」基本計画(区民健康村10周年記念事業). 世田谷区, 47pp.
- 6) 嶋野弥名子, 栗田和弥, 麻生恵(1997):群馬県川場村友好の森における「やま(森林)づくり塾自然教室」について. レジャー・レクリエーション研究, 37. pp.82-83.
- 7) 対等な関係を結ぶことを目指し、いわゆる姉妹協定とせず、「縁組協定」と称している。
- 8) 世田谷区および川場村が出資する世田谷区民健康村の管理運営にあたる第三セクターの会社。